

「文章が書けない」批判の本質と望まれる文章教育

The Essence of Criticism that “the young generation can not write sentences well” and Descriptions of Desirable Sentence Education



公益財団法人日本漢字能力検定協会 現代語研究室長

佐竹 秀雄

国立国語研究所室長、武庫川女子大学言語文化研究所長（同文学部教授）を経て現職。武庫川女子大学名誉教授、日本広報協会広報アドバイザー。編著書に『デイリーコンサイス国語辞典』『サタケさんの日本語教室』『文章を書く技術』など。

✉ shinjin.sat@gmail.com

TEL 0798-68-4531

1 本稿のねらい

企業の管理職の人たちから、「若い社員は文章が書けない」というセリフをよく耳にする。「若い人たちは、きちんとした文章が書けない」「正しい言葉の使い方を知らない」などと言われることもある。ただし、このようなセリフは最近に始まったものではない。40年近く前に企業人と仕事上のかかわりをもつようになって以来、ずっと同様のセリフを聞き続けてきた。年配の人間が若い世代に向かってグチをこぼすスタイルが、時代を越えて繰り返されているのである。

筆者は、かなり長い間、他人が書いた文章のチェックをしたり、文章の書き方の話をしたりする仕事をさせてもらっている。その間、若い時から文章が得意だ、文章作成に自信があると公言する人には、めったに会うことがなかった。ということは、かつて「文章が書けない」と批判されていた人間が、おそらく経験を繰り返すことを通して、いつか「自分は書けるのだ」という自信を持つようになり、その自信から若者批判をしているということになる、と考えざるを得ない。

しかし、これでは、若者たちが文章を書けないという問題は解決しない。それと、この解釈そのものは正しいとしても、次のような疑問が浮かんでくる。

- *「書けない」という若者世代への批判は的確か。
- *「若い社員は文章を書けないが自分は書ける」という自信は正当なものか。

本論では、これらの問題点について考察する。そして、それを踏まえて、実社会における望ましい文章教育のあ

り方について考えを述べたい。

2 「書けない」批判

2.1 「書けない」とは

「書けない」批判の本質を明らかにするが、その前に、「書けない」とはどのようなことなのかを確認しておく。

学校作文の現場における作文が書けない悩みには、2つの代表的なパターンが見られる。1つは「書くことができない」であり、もう1つは「どのように書いてよいかわからない」である。

前者は、「なんでも好きなことを書け」と言われても、何も書くテーマが見つけれられない場合、あるいは、例えば「家族」などと1つのテーマを示されても、どんなことを書いてよいか何も思いつかない場合である。

他方、後者は、書くべき事柄や内容は決まっているものの、それをどのように表現すればよいのかが、わからないというものである。例えば、自分が感動した体験を文章にしたいけれど、何から書いてよいかわからない、あるいは、どのようなことばを使えば自分の感動を述べられるのかわからない場合がそれにあたる。

このように、学校作文における「書けない」悩みとは、「ナニヲ」と「ドノヨウニ」に関する課題がクリアできないことによって生じるのである。

このことを実社会における文章作成にあてはめて考えてみよう。実社会では多くの場合、書き手自身がテーマを見つけようとすることはない。書くべきテーマ、ないし、作成する文章の内容（例えば、報告や起案など）は、



他人から指示されるか、自身が必要に迫られるかなので、必然的に決まる。したがって、上述の「ナニヲ」書くかについて悩むことはないはずである。

そうすると、「ドノヨウニ」書くかが課題になる。ところが、社会人が作成する文章では、ほとんどの場合に「型」が存在する。一般的に、報告書には報告書のスタイルがあるし、案内状には案内状のスタイルがある。あるいは、企業や組織ごとに決められた独自の形式があるかもしれない。いずれにせよ、どんな構成で書くのかの型があるので、その型に合わせて材料を書き込んでいけばよい。書くべきテーマや文章の内容に応じて、どのような材料をどのような構成で書けばよいかについては、それなりに決まっているので、自分の頭でひねり出すことはない。

したがって、材料や構成という点に関する「ドノヨウニ」についても悩まないことになる。悩むとすれば、「ドノヨウニ」書くかの中でも、書くべき材料をどのように表現すればよいかわからないときであろう。つまり、具体的な表現の文言を考えるとときに悩みや迷いが生じる。そういう状態であればミスも生じやすい。

2.2 「書けない」批判の対象と性格

実社会で、どのように表現すればよいかで悩み、その結果、ミスが生じるとすれば、それに対して、批判が行われることは当然であろう。つまり、「書けない」批判の対象になるのは、具体的な表現における欠陥の指摘にあると考えられる。

「書けない」批判に関して、さらに留意しておきたいことがある。その批判の多くが、「正しさ」に絡んでいるということである。冒頭にも述べた「きちんとした文章が書けない」「正しい言葉の使い方を知らない」という言い方の「きちんとした」「正しい」という語から推測できるように、批判者には、あるべき理想の表現が脳中であって、それが書けていない状態を見たときに嘆きもれるのであろう。その批判の原点には「正しさ」が存在すると考えられる。

3 表現上の欠陥

3.1 2つの欠陥タイプ

では、「書けない」批判の対象となる具体的な表現上

の欠陥とはどういうものなのか。次の例文で考えてみよう。

・新しいビルの特色は、まず、玄関には、ご入館された方が開放感を味わえる吹き抜けを、一階中央部分には、ビルの周囲の植栽と館内の雰囲気との調和を企てるため、ガラス張りのロビーが設けられ、まるで建築家の強い主張を示すような透視性のあるスペースが配置されています。

これに対して、次のような指摘がなされる。

- (1) 主語「特色は」と述語「配置されています」とが対応していない。文末を「配置されていることである」「配置されている点にある」などとすべきである。
- (2) 「ご入館された」は敬語の誤りである。「入館された」「入館なされた」など、正しい尊敬表現にすべきである。
- (3) 「吹き抜けを」は「設けられ」を修飾している。「吹き抜けが」と訂正して、「ロビーが」と合わせた受け身表現にすべきである。
- (4) 「調和を企てる」は一般的ではない。「調和を図る」などとするのが正しい。
- (5) 1文が長い。
- (6) 意味がとりにくい。

いずれも確かに欠点であるが、指摘の種類としてレベルが異なっているものが混じっている。

(1)と(3)は文構造や修飾関係といった文法に関する指摘である。(2)は敬語で待遇のあり方に対する指摘であり、(4)は語ないし語句の使い方に関する指摘である。以上は、いずれも誤りの指摘と言ってよい。しかし、(5)と(6)は誤りではなく、読み手がその表現に対して、どのような印象や感じをもったかの視点でとらえたものである。さらに、(6)「意味がとりにくい」の原因には、(5)「1文が長い」ことが含まれている可能性もある。

ここから、表現の欠陥部分には、大きく2つのタイプがあると考えられる。第1は上の(1)~(4)に見られるような、表現を構成する言語要素に欠陥がある場合であり、第2は読み手がその文を理解しようとする立場にとっての欠陥が存在する場合である。いわば言語要素レベルと理解レベルの2種ととらえられる。

なお、表現上の欠陥と指摘されるものには、さらに第3のタイプも考えられる。それは表現対象と表現内容の

事実関係にかかわる。例えば、ある事件について報道しようとしたとき、その内容が事実と反していたり、事実のある一面だけしか伝えていなかったりすれば、当然、それも欠陥であろう。また、論文などで、分析が不十分な場合、あるいは、感想文で書き手の気持ちが十分に述べられていない場合なども当然、欠陥になろう。

ただし、このタイプの欠陥は、表現のあり方の良否ではなく、表現の材料をどこまで書き込んでいるかの基準によって決まる。本論で扱おうとしているのは、内容的な事実関係ではなく、内容となる材料をいかに表現するかのレベルのことなので、この第3のタイプには踏み込まない。

3.2 現実における欠陥の発生状況

次に、この2つの欠陥タイプが、現実の文章場面どのように発生するものなのかについて述べる。

表現上の欠陥に関する1つの調査結果を紹介しよう。ずいぶん昔のデータではあるが、筆者が行政広報紙の表現を分析したものである。日本広報協会による月刊誌『広報』では、かつて「広報クリニック」という企画が行われていた。そこでは、全国の各市町村が実際に発行した広報記事の文章に対して、企画・用字用語・デザインの3点から、それぞれの専門家が長所と欠点を指摘していた。企画で取り上げられた広報紙は、全国の市町村から長所と欠点を指摘してほしいと応募されたものである。

筆者は、用字用語について20年以上にわたって担当した。そのうち、1987年～1991年に発行された広報紙で指摘したものが、延べ336紙、約1300ページ分ある。それらのうち、ここでは、表現に関して筆者自身が欠点と判定したものを取り上げる。

元のデータは、原文の多方面にわたる欠点を具体的に指摘していた。それを今回は、表現上の欠点に関するものだけを取り出して、それがどのような種類の欠点なのかを分類しなおした。表現を対象としているので、誤字や送り仮名のミスなどは対象外としている。全体で483件が対象箇所である。その結果を表にすると、次のようになる。

なお、筆者はこのころ以降も広報紙を観察し続けているが、欠点の出現状況に大きな変化は認められていない。よって、昔のデータによる次の結果は、今でも大きな違いはないと考えている。

表 表現上の欠点の分類

種類	件数	比率 (%)
(1) 文法上の誤り	138	28.6
(2) 語句選択・語法上の誤り	120	24.8
(3) 敬語の誤り	34	7.0
(4) 意味がとりにくい	100	20.7
(5) 文章構成の欠陥	27	5.6
(6) 文体の欠陥	24	5.0
(7) その他	40	8.3

(1)「文法上の誤り」で最も多いのは、語句の修飾関係のミスであった。「その原因は、……昨年に工事をしました」のように主語と述語の対応がとれていないものや、「すごいまじめに努力しています」のように、用言の修飾に連体形が使われるようなミスが見られた。その他に多かったのは「ため池には柵を設けたり、立て札を立ててもらおう」のような「……たり……たりする」の並列関係が崩れるものであった。

(2)「語句選択・用法上の誤り」は、語句の使い方に関するミスである。「ごみの分別」を「ごみの分類」とする類義語のミスや、「下取りする」を「下取る」と使う勝手な造語も含まれる。さらに、「汚名を返上する」と「名誉を挽回する」が混じり合う「汚名を挽回する」のような慣用句の間違いも含まれる。

(3)「敬語の誤り」で問題が大きいのは、尊敬表現での誤りである。「ご連絡ください」とすべきときに「ご連絡してください」としてしまう。あるいは「お話しなされた」とすればいいときに「お話しされた」としてしまふ。いずれも、尊敬表現の中に「ご(お)〇〇する」という謙讓表現を含めてしまうミスである。

以上、(1)(2)(3)は、前節で述べた「言語要素レベルの欠点」に当たる。それに対して、「理解レベルの欠点」は、(4)と(5)である。

(4)「意味がとりにくい」の例としては、

- ・ 必要な語句が不足して意味が不明確である。
- ・ 1文が長すぎて意味がわかりにくい。
- ・ 読点が不足するために意味があいまいになる。

が挙げられる。いずれも、語句や文法的な使用に関する欠点はないが、その文ないし文章を理解する際に、欠陥が生じるというものである。

(5)「文章構成の欠陥」は、文ではなく文章全体として見たとき、文章の材料の並べ方、すなわち、ものごとを述べる順序に欠陥があるものである。その欠陥のため

に、書き手の言いたいことが理解しにくい文章になっている。これも「理解レベルの欠点」と言えよう。

(6)「文体の欠陥」は、多くはデアル体とデスマス体が混じってしまうものであった。

以上の結果から注目されるのは、「言語要素レベルの欠点」が約60%を占め、「理解レベルの欠点」も約25%存在することである。

4 「書けない」批判への批判

4.1 「書けない」批判の本質

ここまで述べてきたことを整理すると、次の2点にまとめられる。

(1)「書けない」批判の中核は、表現の欠陥の指摘にある。

(2)表現の欠陥の発生状況は、「言語要素レベルの欠点」60%で、「理解レベルの欠点」25%であった。

両者をからめて考えると、「書けない」批判は、欠陥の60%も占めて目につきやすい「言語要素レベルの欠点」に向かうことが容易に推測される。見方を換えれば、「書けない」批判は、若い世代が書いた文章における語句の使い方に対する欠点や文法上の欠点の多さによって生じたとも言えよう。

実社会における文章作成は、多くの場合、その内容が日々変化するものではない。特にビジネス現場などにおいては、文章の型やスタイルの定まっていることが多く、使用する語句も比較的变化が少ない。だから、繰り返し文章作成を経験すれば、文章の型にも使用する語句にも慣れてくる。慣れれば、当然ミスも少なくなる。経験を積むことで、「自分は書けるのだ」という自信が生まれ、同時に「若い世代は書けない」という批判が生じる。つまり、「書けない」批判の根拠が「言語要素レベルの欠点」の指摘にあると考えると、矛盾が生じない。

では、欠点の25%を占める「理解レベルの欠点」については、どうだろうか。これも「書けない」批判の根拠になっていても不思議はない。しかし、「理解レベルの欠点」は、前節でも説明したように、正しさに関する欠点ではなく、文ないし文章を理解する際に生じる欠陥である。そのため、この欠点が指摘されるには、表現の正しさのチェックではなく、文脈を踏まえた意味上のチェック、それも、読み手側の立場からのチェックが行

われなければならない。ところが、「2.2. 「書けない」批判の対象と性格」で述べたように、「書けない」批判には正しさ追求の精神が存在する。正しさ追求の視点からは「理解レベルの欠点」は見つけにくい。「理解レベルの欠点」は「正しさ」よりも「伝わりやすさ」にかかわるものだからである。

4.2 「書けない」批判の問題点

よって、「書けない」批判がその根拠として指摘するものは、「言語要素レベルの欠点」が中心であり、「理解レベルの欠点」については不十分だと思われる。そして、この点にこそ、「書けない」批判の問題点が存在する。

もちろん「書けない」批判が「言語要素レベルの欠点」を追求することは、決して悪いことではない。表現上の欠陥の調査で見られたように、現実にも最も多く生じやすい欠点なのだから、それを批判することは当然である。

しかし、実社会での「言語要素レベルの欠点」は、現実の経験を積むことで解消される可能性もある。それに対して、「理解レベルの欠点」は経験では克服できない。上に述べたように、理解レベルのチェックをするには、読み手の立場に立って文章を考える態度が必要である。ところが、そのような態度は、残念ながら、学校の作文教育のときから訓練されていない。作文教育では、行事作文に代表されるように、自分の行動や感情を書き記すことを奨励されてきた。いかに事実を正確に記述し、感情を精密に表現するかに力が注がれてきた。その結果、多くの人は、自分が書きたいことをいかに正確に、正しい表現で書くかに腐心する。読み手がその文章表現をどのように理解するかについては意識すらしないのである。

ひたすら正しさにこだわり、読み手の理解のあり方には目を向けない態度をとることが、「書けない」批判者の本質なのである。自分が述べたいことを正しい表現で書けばよいと考え、正確性は重視されるが、伝達性は軽視されるのである。

文章の目的は、文章によって異なるけれど、それがどのようなものであっても伝達されるべきことが存在する。実社会の実用的な文章においては、なおさら伝達性こそが第1であろう。それにもかかわらず、伝達性を軽んじた視点の批判がまかりとおっていることが問題なのである。

4.3 「自分は書ける」自信への疑問

「書けない」批判は、また、「若い世代は書けないが自分は書ける」という自信と連動していた。「書けない」批判では、「理解レベルの欠点」への目配りが十分でないとわかった以上、「自分は書ける」という自信も正当なものだと断言できまい。「書けない」批判は、言語要素レベルを重視していたのだから、正しさや形式に関する点での自信があったと思われる。しかし、文章では伝達性こそが重要だという視点に立つと、その自信は偏った自信だと言わざるを得ないだろう。

5 文章教育に求められるもの

5.1 効果的な文章教育の必要性

「書けない」批判が的確なものではないこと、また、批判者の自信も正当性に乏しいことがわかった以上、若い世代への文章教育について改めて考える必要がある。

まず確実に言えることは、効果的な文章教育を実施する必要が大きいということである。「書けない」批判をしている暇があれば、問題点を解決するための文章教育を行うべきである。企業や組織では、現実には、さまざまな研修が行われているようだが、文章教育はあまり熱心にされていないようだ。一つには手間がかかるのが理由であろう。実際に文章を書かせてそれを分析し、それぞれの弱点を見つけて教育するとすると、膨大な時間と手間がかかる。しかし、手間がかかるからこそ、早めに研修すべきだとも言える。新入社員が社内の各部署を回って、上っ面だけの体験研修をするよりは、はるかに実質的な効果があると考えられる。しかも、文章で作る文書には、それぞれの企業や組織における約束事がある。それを早めに習得することも意義深いはずである。

では、効果的な文章教育をするには、その中身にどのような要素を取り入れるべきか。これまでに見てきたことから考えて、理解レベルの欠点を補う指導を取り入れることである。以下、現実において効果があると考えられる2点の重要な指導項目を取り上げる。

5.2 構成力の指導

第1点は構成能力を鍛えることである。文章構成力とは、文章において、どのような材料をどのような順序で述べるかに関する判断能力である。これを取り上げた

のは、近年、構成力が弱っていると思われるからである。その原因の1つが企業や組織に行われている文書作成方式にある。

職場では、多く場合、テンプレートを使って、文書フォーマットに合った文書が作成される。テンプレートは、書き込むべき内容が指示されていて、指示通りの内容を記入すれば文書が仕上がるという便利なものである。効率的だし実践的である。これを学ぶことは、実務の上で絶対に必要であることは間違いない。しかし、この便利さによって、使用者はフォーマットの意味、すなわち、フォーマットの構成の意味を考えなくなる。その文書において、その順序でそのような材料を並べることの意味を考えない。さらには、このフォーマットでよいのか、すなわち、この構成でよいのかと疑問に思い、よりよい構成を目指すこともしなくなる。テンプレート方式が構成力を退化させているのである。

構成は文章の伝達に大きな影響を与える。例えば、

A 彼は仕事を休んだことがない。

B 彼はギャンブルがやめられない。

の2つの材料を、どちらを先に述べるかによって、読んだ印象は大きく異なる。Aを先にして「彼は仕事を休んだことがないが、ギャンブルがやめられない」なら、彼の印象はよくない。しかし、Bが先なら、それほど悪いとも言えなくなる。

このように影響力のある構成を効果的に利用することによって、自分の考えを読み手にうまく伝えることもできるし、読み手を説得することに応用することもできる。だから、構成力をつける教育が必要なのである。

構成力の具体的な教育法としては、まず構成の意味を認識させることである。文章というものは、段落、あるいは段落のまとまりの部分といった材料によって構成されている。段落や部分は、それぞれの役割を担っている。その役割は、段落や部分どうしが互いに関連しながら、文章の主題、すなわち書き手の言いたいことを述べるために必要な働きをすることである。段落や部分が主題のために必要な役割を果たしていることが、構成の意味なのである。

構成の意味が認識できたところで、次に、構成を把握する実践トレーニングに入る。実際の文章を読んで、段落や部分の役割を考え、主題と役割の関係を解き明かす訓練をするのである。構成力をつけるには、実際の文章



の分析をすると効果がある。実際の文章は名文である必要はない。文章の構成について分析していると、なぜそのような構成なのかを考えるようになる。さらには、主題のためにもっと違った構成のほうがよいのではないかと考えるように進歩する。そして、その経験を自分の文章にもあてはめられるようになったとき、構成力が身についたと言えるのである。

5.3. 読み手を意識させる指導

第2の指導項目は、読み手を意識する有効性を理解させることである。

すでに繰り返し述べてきたように、文章の本質は伝達にある。そして、伝達には目的がある。例えば、読み手に正確な情報を伝えたいという目的の場合もあれば、ある情報を伝えて読み手を感動させ、自分の思い通りに動かすという目的の場合もある。文章とは、それぞれの目的を達成するために情報を伝達するものである。その目的が達成できてこそ文章の意味があり、それができなければ、語彙や文法の面でどんなにすぐれたものであっても意味がない。

文章とは、書き手が読み手に自分の思うように理解させ、行動させるための手段の1つなのである。読み手を自分の思い通りに理解させるには、当然、そのための知識と訓練が必要となる。教育する側から言えば、読み手を動かす表現の知識を与え、その実践トレーニングをするカリキュラムが必要となる。

知識としては、読み手が文章をどのように理解するか、つまり、人間の文章理解がどのようにしてなされるかを教える必要がある。人間の文章理解とは、文章のことばかりから意味を取り出し解釈をするだけではない。ことば以外の情報、すなわち、状況、場面、人間関係などを含む広い意味での文脈を踏まえて解釈をするのである。「よろしくお願いします」というありきたりの表現も、だれが、いつ、だれに、どういう場面で述べるかによって、読み手の理解は異なる。好意的な解釈にも悪意をもった解釈にもなりうる。この理解のあり方をまず考えることが必要になる。

次に、このような読み手の理解のあり方を計算した表現の工夫を考えるとよい。例えば、文章中に「将来はどうなるのだろうか」という疑問が書かれていれば、読者は、その後に解答が述べられることを予測する。だから、

主張を述べる場合に、それが答えになる問いを前もって投げかけるというのも1つの表現の工夫になる。

もとより、文章の伝達目的には文章ごとにさまざまな場合がある。したがって、文章作成においては、個々の文章ごとに、読み手が文章理解をどのように行うかを分析しながら表現を工夫することが求められる。これからの文章教育では、その工夫を書き手が自分でできるようになるトレーニングが必要なのである。

以上の「構成力の指導」「読み手を意識させる指導」のいずれも、言語要素レベルにかかわる指導項目ではなく、理解レベルにかかわる指導項目である。言語の正しさではなく、読み手にいかに理解しやすい構成を提供するか、あるいは、読み手の理解のあり方をいかにうまく利用するかを考えることにかかわる。したがって、これらの2点の指導では、理解する人の身になって考える態度が強く要求される。

これらの指導をするには、それなりの人材が必要である。過去の文章作成経験だけで指導できるものではない。また、さまざまな場面を想定したトレーニングが必要である。そのトレーニングを組み込んだカリキュラムが文献[3]である。詳しくはそちらを参照されたい。

参考文献

- [1] 佐竹秀雄・岸本千秋, 悪文のパターンと出現メカニズム, 武庫川女子大学言語文化研究所年報 5, 1994
- [2] 佐竹秀雄, 文章を書く技術, ベレ出版, 2006
- [3] 日本漢字能力検定協会, 基礎から学べる! 文章力ステップ, (4級・3級・準2級・2級), 2015~17.
- [4] 佐竹秀雄, 伝わる表現のための方策と文章指導, Japio YEAR BOOK, 2017

